

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：52501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00861

研究課題名(和文)ドイツ語表現力向上プロジェクト - 「書く」ことを目的とした「話す」こと -

研究課題名(英文)Improving German Expression Usage - "Speaking" to facilitate "Writing"

研究代表者

柴田 育子 (Shibata, Ikuko)

木更津工業高等専門学校・人文学系・教授

研究者番号：90300540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「CEFR A1/A2レベルの日本語を母語とするドイツ語学習者」のドイツ語表現力、特に「書く力」を向上させることである。

本プロジェクトでは、複数言語を用いた(母語+ドイツ語+英語)俳句や連歌の国際ワークショップを開催し、「短文を書くこと」に焦点を置いた。これは、「俳句や連歌」といった日本語を母語とする外国語学習者にとって馴染みの表現方法を活用することによって、「多様な形式でストレスなく書いてもらう」ためであった。「国際ワークショップという場」を提供することにより、一方で日本文化の紹介にもなり、言語学習に対する意識付けや文化交流という副産物も生み出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学習目的として、文化や社会の知識の習得、コミュニケーション能力の養成を重視している日本の学校の外国語学習において、筆記力に重点を置いた研究を行った。

複数言語を用いた、国際ワークショップの開催により、学習者が実際に外国語を使うプログラムを提供した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to improve the ability of "native Japanese speakers with a CEFR A1/A2 level of German" to develop the ability to express themselves in German, especially in the skill of writing.

This project focused on "writing short texts," such as those found in haiku and renga, by organizing multi-lingual (mother tongue (Japanese) + German + English) international workshops. The purpose of these workshops was to "encourage students to write stress-free in a variety of forms" by using haiku and renga. These forms are familiar to language learners around the world as they are taught not only in Japanese foreign language classes but also language classes taught in the students' mother tongue. By providing such multi-lingual writing workshops, the researchers were able to introduce Japanese culture, and thus create the by-products of language learning awareness through the written word and cultural exchange.

研究分野：外国語教育

キーワード：ドイツ語 学習者ネットワーク 書く力 CEFR A1/A2 短文 国際ワークショップ 複言語

1. 研究開始当初の背景

「新聞制作を通じた CEFR A1/A2 レベルにおけるドイツ語表現力向上の研究」に従事する過程において、「CEFR A1/A2 レベルの日本語を母語とする学習者」が「ドイツ語を書く力」を向上させるために必要とされる項目が明らかになってきた。それは次の 3 点である。

初級レベル (CEFR A1/A2) の執筆者に必要とされる文法項目と語彙数。

記事のテーマ選びが、ドイツ語で新聞記事を書くモチベーションを高めること。

在日ドイツ企業訪問、国際ドイツ語キャンプへの参加等、記事執筆者が実践的に言語活動した内容(「話すこと」)を文章化すること(「書くこと」)が筆記力の向上に効果的であること。

記事を執筆するドイツ語学習者は、入学・卒業によって毎年次々に入れ替わるので、執筆者のスタートレベルが CEFR A1/A2 であることに変わりはない。それ故、ドイツ語で書くことを指導する側が、習得項目を具体的に明示し、動機付けを的確に与えることができるなら、初級レベルの学習者でも効率的にドイツ語を書く力を習得することができる。このような動機に基づき、本研究においては、「CEFR A1/A2 レベルの日本語を母語とする学習者」がドイツ語を書く力を向上させるための過程と方法について実証的に研究をおこなうことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点である。

国際的なドイツ語学習者ネットワーク PASCH-Global (<http://blog.pasch-net.de/pasch-global/>)と連携したドイツ語新聞 JAPAN HEUTE 制作を通じて、「CEFR A1/A2 レベルの日本語を母語とするドイツ語学習者」にとって、効果的なドイツ語表現力向上の方法について実証的に研究する。

在学中に使用した Moodle「学習者ネットワーク」を卒業後の「同窓生ネットワーク」へと発展させることによって、卒業後もドイツ語学習を継続できる機会を提供し、生涯学習としてのドイツ語学習を可能とする「コミュニティ・ドイツ語」の場を完成させる。

3. 研究の方法

本研究では、当初、以下の 3 点に重点を置き、実証的に研究をおこなった。

在日ドイツ企業訪問(4社/年)やプロジェクト授業(4回/年)におけるドイツ語のプレゼンテーション=「話すこと」を、新聞記事執筆=「書くこと」へとつなげる「書くことを目的とした話すこと」という表現力向上プログラムの開発。

PASCH-net(<http://www.pasch-net.de/de/index.html>)の Moodle を活用した国際プロジェクトを実施し、中期的なドイツ語表現力向上プログラムを開発すること。

在学時にドイツ語新聞制作に関わった卒業生を対象とする「同窓生ネットワーク」を構築し、ドイツ語の生涯学習を可能とするオンラインルームの開発と実用化。

上記の 3 つの実証的方法を用いての研究過程の中で、学習者にストレスなく楽しく外国語を書いてもらう場を作る必要があることを強く考えるようになった。学習者は、「CEFR A1/A2 レベルの日本語を母語とする学習者」であり、外国語を書くことに慣れていなくても、書くことに対する苦手意識や不安感を抱いているからである。そこで、複数言語を用いた(母語+ドイツ語+英語)マルチリンガル国際ワークショップ、特に俳句や連歌の国際ワークショップを開催し、「短文を書くこと」にフォーカスした試みをおこなった。「俳句や連歌」といった日本語を母語とする外国語学習者にとって馴染みの表現方法を活用することによって、「多様な形式でストレスなく書いてもらう」ためのものである。この試みは、有効的であった。

4. 研究成果

本研究研究成果は下記である。

・筆記力向上のためのワークショップを、定期的に行うことができた。

・オーストリア・セルビアとの国際プロジェクトを進めることができた。

・ドイツ語新聞を発行し、PASCH-net(<http://www.pasch-net.de/de/index.html>)と協働して、新聞記事を Web 上 (PASCH-Global) に公開することができた。

・在日ドイツ大使館およびドイツ企業訪問に参加し、ドイツ語学習の実践的機会を学習者に提供することができた。またこの訪問において、参加者が大使館や企業について事前に調べた「ドイツ語のプレゼンテーション」(=「話すこと」)を行うことによって、それを新聞記事執筆(=「書くこと」)へとつなげることができた。

また、本研究の成果について、アジア・ゲルマニスト会議 2019 札幌大会、国際ドイツ語教員連盟研究発表会 2022 (オーストリア・ウィーン)などで、研究発表をおこなった。

ただし、研究目的の 2 つ目である、在学中の「学習者ネットワーク」を卒業後の「同窓生ネットワーク」へ発展させることについては、いくつかの課題が残された。在学中に CEFR A2~C1 レベルまで到達したドイツ語学習者が、卒業後そのレベルを維持できないことがたいへん多く、その理由として、ドイツ語を継続して使用する環境が見つからないという現状があることが分か

った。この課題を解消し、生涯学習としてのドイツ語学習を可能とする「コミュニティ・ドイツ語」の場を構築していく課題があることが明確となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ikuko SHIBATA, Johannes MAERK	4. 巻 1
2. 論文標題 Interkultureller Spracherwerb und Binnendifferenzierung: Fallbeispiel eines Kooperationsprojektes zwischen Japan und Oesterreich	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo	6. 最初と最後の頁 892-897
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 柴田育子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 一年間を通じた遠隔授業の報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高等学校ドイツ語教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 67-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田育子、小林勇斗、山崎凌輔、橋本沙羅、芝崎裕、木村幹、高田竜司	4. 巻 第20・30号
2. 論文標題 PASCH校ワークショップ「世界をつなぐ」に参加して - ドイツ語でプログラミングの世界に触れる -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高等学校ドイツ語教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田育子、齋藤望結、大場翔太、眞角晏奈、木下洋平、藤野聖也、村越遼太、伊藤直樹	4. 巻 第20・30号
2. 論文標題 デジタル・ワークショップ「世界をつなぐ」2019に参加して - あるいは高等専門学校の国際交流のあり方について -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高等学校ドイツ語教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田育子、添田千裕、能登慶和	4. 巻 第20・30号
2. 論文標題 PASCH 10年を振り返って	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高等学校ドイツ語教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Ikuko Shibata
2. 発表標題 Deutschunterricht fuer Lernende, die vorerst kein Studium oder Aufenthalt in einem deutschsprachigen Land anstreben: Herausforderungen fuer Deutsch als Fremdsprache in Japan
3. 学会等名 GETVIC024/the virtual German teacher conference, Goethe-Institut, Deutschland (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田育子、Lisa Gayle Bond
2. 発表標題 筆記力向上のための短文作成を目的とするマルチリンガルワークショップの効用について
3. 学会等名 日本独文学会2020年秋季研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴田育子
2. 発表標題 「同窓会ネットワーク」から「学習者ネットワークへ」 「木更津高専ドイツ語ネッツ」の未来像
3. 学会等名 第49回高専ドイツ語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田育子
2. 発表標題 HaikuとElfchenを通じたドイツ語表現力向上プロジェクト
3. 学会等名 第49回高専ドイツ語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikuko Shibata, Johannes Maerk
2. 発表標題 Interkultureller Spracherwerb und Binnendifferenzierung: Fallbeispiel eines Kooperationsprojektes zwischen Japan und Oesterreich
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田育子
2. 発表標題 複言語による国際交流プロジェクト - 木更津～パンチェヴォ2018 -
3. 学会等名 第48回高専ドイツ語教育研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	BOND L・G (BOND LISA) (30288691)	獨協大学・外国語学部・教授 (32406)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------